原典に就く

私たち任運荘の職員福祉講座で『福翁自伝』（岩波文庫）の輪読は一年かかっていた。福沢諭吉自身が語る丸ごとの福沢に接した感動は、今なお続いている。原典そのものの持つ迫力である。提出された読後感想文には共通点があった。「暗殺は別にして借金ほど怖いものはない」という言葉に集中していた。「幼少の時から貧乏の味をなめつくし、母の苦労した様子は生涯忘れられません」（二四六ページ）。「封建制度は親の敵でござる」は、具体的には福沢にとって貧乏は親の敵であったのだ。

中津藩に見切りをつけ江戸に赴く時、まず按摩術を習っている。食えなくなった時への対策である。彼はいつも最悪の場合を考えて行動する。専門の蘭学が時代遅れと知るや、英語独学にふみきる（二十六歳）。アメリカへの使節団には下僕になっても加わる。七年後それらの見聞を基に『西洋事情』を著して空前の反響。それからの収入で明治元年正式に慶応義塾を創設、時に三十五歳、まだ大事業への志は燃えていない。

明治政府が予想以上の開国政策をとろうとしていると判断するや、「コリャ面白い。この勢いに乗じて大いに西洋文明の空気を吹き込み、絶遠の東洋に一新文明国を開き、東に日本西に英国と、第二の誓願を起こす」（三一六ページ）。

政府権勢に一切近づかず、舌と筆だけでこの誓願を完結する。これ、彼が第一第二の誓願の順序を誤らなかったからである。彼の最後の言葉がすこぶるよい。わが誓願は「天の恵、祖先の余徳によって首尾よくかのうた」と。

（一九九一年八月三十一日）